

エコノミスト 556.1.6

本書全体は、国家独占資本主義の必然性を説明するための、方法的基礎を論じた前半(第一〜四章)と、国家独占資本主義の制度的・機能的手段を叙述した後半(第五〜八章)とに分けられるが、本書のユニークな点は、何と云っても前半にある。従来、国家独占資本主義は、所有や分配関係の国家による修正、あるいはフィスカル・ポリシーによる景気の安定など、マクロのレベルで論じられることが多かったが、著者によれば、より基礎的なミクロのレベルから解明されなければならないという。すなわち、著者は、「国家独占資本主義は、価値と使用価値とのあいだの…矛盾の発展における一階梯とみなすべきである」(七六六)という

はそれにもとづく有用性の量的通約可能性を認めていること、第二に、いわゆるサービス労働も価値生産的労働としていること、第三に、価格決定における限界値の役割に注目していることの三点である。

著者の意図は成功したか

これらの論点は、ソ連の経済学界の非教条主義的部分を表現していると同時に、ソ連社会主義経済の計画上の必要を反映しているものでもあろうが、率直にいつてきわめてわかりにくい。著者は、有用性が量的に比較できないという思想をマルクスのものだとすることは根拠がないといっているが、有用性が量的に比較できるものだという思想は、古典的限界効用価値説を別とすれば、いまどきの近代経済学の中にも稀少なのではない。著者が一定労働時間のあいだに創出される有用性を数量化して作成しているモデル(二〇二六)は、まさに「限界効用均等の法則」のバリエーションにほかならない。また著者は、「価格は劣等な

企業の諸条件によって規定される」という命題を一般的に主張する根拠として、「もし価格が当該企業の生産費を補償せず、また利潤をもたらさなかったならば、企業は機能することができないであろう」(九四四)といっているが、問題は、この劣等企業のうけとる利潤が、自由競争の条件のもとで、平均利潤であるかどうかである。もし平均利潤でないとしたら、この劣等企業の個別的な生産価格は生産価格にひとしくないので、劣等な企業の諸条件が価格を規定するといえないであろう。このように、ミクロのレベルでの議論したい疑問をふくむものであるが、ここでの分析が著者の全体としての国家独占資本主義論をどれだけみりあるものとしていえるかという点でも、評者は懐疑的とならざるをえない。著者は価値論のレベルから国家独占資本主義にアプローチし、とりわけ第六章では独自の価格形成にたいする国家の直接関与を検討しているにもかかわらず、そこでの結論は、「独占資本主義のもとでは、価格と所得はいぜんとして市場的競争で

あり、国家の影響によってほとんど左右される」(二二五)といふものだからである。国家独占資本主義を労働価値説の深みから解明するという著者の意図は、必ずしも成功しているとはいえないにせよ、本書が主題にかんする広範な問題ととりあつた力作であることはまちがいない。とくに日本の読者にとっては、日本での議論や事実が分析の素材として数多くとり上げられていることは興味深いものがある。最後に翻訳についての苦言をひとつ。翻訳には苦心のあとが見られるもの、必ずしも流暢

とはいえない。とくに読者が困惑させられるのは、人名の表記がロシア語式のまま行われている場合があることである。たとえば、C・ライト・ミルズを「C・B・ミルズ」、W・O・イケンを「B・O・イケン」など。また原文自身の問題かも知れないが、クズネツツの「所有革命」(二六七)は「所得革命」の誤りであろうし、「ユーロカレンシー」(二八〇)という貨幣単位(二八〇)という説明も疑問である。これらについては改善を望みたい。(評者は中央大学教授)(合同出版社 三八〇円)

『失われた中国革命』

中国革命第一世代の貴重な証言

評者 毛利 和子  
「四人組」の追放、「四つの近

る。その中で文化大革命とその発動者、毛沢東が鋭く問い直されているのはいうまでもない。ひいては、果たして一九四九年の中国革命は何を解決し、何を未解決のまま残し、また新たにどのような課題を提起したのか、という問いに改めてぶつかる思いがする。

めた本書は、興味深く、また時宜を得ている。彭述之は現在八五歳、四九年に亡命してから香港、ベトナム、ヨーロッパを流転し、いまアメリカで文筆活動を続けている。彭は二五〜二七年の中国国民革命(本書では「第二次革命」)当時の中共党の最高リーダーの一人だが、二九年にトロツキストとして陳独秀らとともに除名されてから、四八年末までは中国内で「左翼反対派」を組織して宣伝活動を行い、四九年からは海外で中国情勢を論ずると共に、「第四インター」の組織者として活動してきた。二九年以後の半世紀は、おそろくは権力から追われ、革命からも孤絶した、筆舌に尽くしがた

い苦難の道のりだったにちがいない。本書は、第一部革命中国への批判(五一〜六九年の論文四編)、第二部中国革命の中で(二四、二九年の論文四編)、第三部彭述之の過去と現在(妻であり同志でもある陳碧蘭による伝記、中嶋氏による小伝、六六〜七七年のインタビュー記録四編)、第四部プロフィール、の四つに分かれている。本書を通じて彭述之の次のような考え方が明らかとなる。

導する永続革命以外にない、(2)四九年革命は武装農民軍による勝利で、「第二次大戦」がもたらした複雑で例外的な諸条件の組み合わせ」にほかならず、それ自体異常である、(3)五四年当時の中国政權は、「ブルジョア独裁からプロレタリア独裁への一種の過渡的な歪曲された二重政權」であり、結局東欧型の「交際の労働者国家」になるだろう、(4)文革の狂気性は、社会主義的経済土台と、独裁者を頂点とする「権力極大の官僚専制」という政治構造の間の調和しがたい矛盾の反映であり、こうした政治構造の交差、社会主義的民主主義的政治革命なしに中国の近代化はありえない。

ほうじつし 一八九五年湖南省生まれ。中国共産党創期の最高指導者として活躍。一九二五〜二七年革命の敗北のち、陳独秀とともに中国トロツキズム運動を開始。にして極端に狂信的にして偏狭な「ローマ教皇と象の始皇帝を兼ねた独裁者」、「頭固派スターリニスト」にほかならないが、劉少奇に対しては、「柔軟なスターリニスト」としながらもその路線に共鳴している。第一部の「五四運動と文化大革命」は六〇年の中国革命を共に歩んできた彭だからこそ書けるすぐれた論文だが、そこに見られる思想家彭は、編訳者もいうように、「トロツキスト」というよりむしろ社会主義的民主主

絶賛発売中



郭沫若選集 全十七巻

日中国交回復記念出版

氏は文学者でもあり、歴史家でもあり、考古学者でもあり、そしてまた、現代中国を背負う指導者の一人でもある。私の小説「天竺の旗」を中国で紹介するきっかけを作ったのも氏であり、蓬真和上を日中文化交流の上で大きく取り上げたのも氏である。私がかねがね、そうした氏の全著作をまとめて読みたいと思っていたが、その機会が意外に早く来たことを嬉しく思っている。井上 端

- ▲刊行委員▲ 浅川謙次、伊藤武雄、上原淳道、倉石武四郎、白石凡、末川博、杉本達夫、須田禎一、拓植秀臣

全巻内容

1 少年時代	10 李白と杜甫 下
2 創造十年	11 中国近代研究上
3 革命春秋	12 中国近代研究下
4 抗日戦争回想録	13 青銅時代
5 郭沫若詩集	14 奴隸制時代
6 史劇 屈原の花	15 歴史人物
7 史劇 天竺の旗	16 歴史研究論文集
8 屈原研究	17 郭沫若評論集
9 李白と杜甫 上	

雄渾社 (075)722-5151 京都左京区大前 雄渾社 1914

義者に近い。これは、中国政治の現実の展開が、彭のかつての立場に転換を迫ったとみるべきであろうか？

### 欲しい革命家

#### としての彭像

本書は文革期の思想家彭述之の立場をよく知らせてくれる。

だが、革命家彭を見ようとすればバランスを失っていると感は拭えない。革命家彭の理論と行動がまさに問われる二五―二七年の論著が落ちてゐるからである。当時の彭（ペトロフ）を「右翼的傾向の代表的人物」として糾弾したのがキム（少年国際の代表であったし）（「上海からの手紙」）、ライバル翟秋白が彭を「書生流の革命観、政客流の政変観」をもったメンシエビキと痛烈に批判していたのは周知のところである。

また、かつての同盟張国燾も、彭は中山艦事件後に右翼的誤りを犯し、蔣介石の二七年クーデター前の南京蜂起の指導を放棄したと論難している（この点については、香港の『明報』月刊誌上で二人の間に論争がある）。当時の彭の立場を知

るには、二七年六月の彼の論著『中国革命の根本問題』は欠かせない資料である。このほか、本書には入っていないが、中ソの論争と対立についての彭の立場も知りたいところである。

なお、彭述之と一九三二年に合流し四二年に袂を分かった王凡西の『中国トロツキスト回想録』（矢吹晋訳、栢植書房、一九七九年）を併せ読めば、彼らトロツキストの内部抗争、絶え間ない苦闘と苦悶の有り様が一層鮮明になる。また、終始民主主義者でかつ強烈なナショナリストであった陳独秀と対照して彭述之の思想傾向も改めて浮かび上がってこよう。

毛沢東、周恩来、劉少奇、そして「異端」の王明、張国燾亡きいま、中国革命の第一世代はついに彭述之を残すだけとなった。だが中国の「革命」はいまだ終わってはいない。その多難な過程と複雑な内容を理解するには、さまざまな登場者のいろいろな角度からの証言が必要である。本書はその証言の貴重な一つにはかならない。

（評者は日本國際問題研究所研究員）  
（新評論 二〇〇〇円）

## LIBRARYらいいらりいライブラリLIBRARYらいいらりいライブラリLIBRARY

### 円・ドル・金

（荒木 信義著）

戦後の通貨体制は、ドルと金を基軸に動いてきたが、フロート制以後、まさに激動の時代を連えている。ドルの弱体化、強い通貨の浮上、石油価格の急上昇によるオイル・マネーの登場など、話題にこと欠かない。

筆者は、そういう通貨情勢を克明に追ひ、危機的様相を呈したヤマ場をわかりやすく描くことよって、複雑なからみ合いを解きほぐそうととめてゐる。田安、田高と一喜一憂するさいにも、実は経済力の相対的關係を見落としてはならないが、著者は日本経済との関連にも要領よく触れている。

この種のものに手なれてゐる著者の本だけに、格好の入門書でもあろう。

（教育社 一五〇〇円）

### 盗聴教団

（山崎 正友著）

創価学会の内紛はドロ泥の状態といつていいが、本書は内紛の火付け役となった同会の元顧問弁護士による証言で

ある。すでに一部は週刊誌に掲載されているが、改めて読むと日本最大の教団が、いかに「教祖」の池田大作の恣意的行動によって動かされているかがよくわかる。

とくに盗聴という反社会的、犯罪的手段を使って反対者を封殺しようとしていたのは、実行者が宗教団体であるだけに恐ろしさを感じさせられる。本書のもう一つの主題である「シーホース」の倒産については、著者の弁明のところがあがるが、顧問弁護士が余りにもコミットし過ぎることの危機性を教える。

（晩聲社 九八〇円）

### USA vs 日本

（リフオーム・クラブ著）

二〇世紀の残り二〇年間、「日本はどうしたら米國を日本と一運托生の立場に追い込めるか」。こうした問題提起が妥当かどうか議論のあるところだろうが、官僚、エコノミスト、ジャーナリストから成る若干研究集団が三年間このような問題意識を持って、

貿易、食糧、技術、防衛、石油、援助、金融、財政の八つのテーマについて議論し、その成果を政策提言としてまと

めたものである。

ふだん、新聞では日米経済摩擦についてのニュース報道は多いが、では具体的にどうしたらよいかはあまり書かれない。本書の特色は、日米経済摩擦の解消に向けて具体的なかつ現実的な政策提言が行われている点にある。

（ダイヤモンド社 一一〇〇円）

### 体験的経済記事

#### の読み方

（太田 稀著）

新聞の中で経済面はもっともむずかしい、というのが一般読者の感想であろう。これに対し著者は、何とかやさしく書けないものだろうか、という意識を絶えず持ち続けてきた。

本書はこうした視点から、経済記事の読み方をくわしく解説すると同時に、日本経済の構造を身近な問題から説き、また戦後経済の流れ、八〇年代への視点まで、広い視野に立って日本経済を展望する。

単なる新聞の読み方といったハウツーものでなく、しかも体験に裏打ちされた好著である。

（三修社 一三〇〇円）